

及び農奴の拘束された労働契約は團體契約とは一世界懸け離れてゐる。前者がその拘束を共同社會關係に負ひ、超個人的な・窮極に於て外經濟的な・規範に依存してゐたに對し、後者は資本主義精神から生れ、利害の觀點により支配されてゐて、純合理的目的形象である。それ故後者はまた資本家的合理性の高度の段階と稱せられるが、それは自由な労働契約より資本家的目的の要求に適してゐるからであり、就中それが労働協定に與へる大なる恒常性<sup>ペステンデイツヒカイト</sup>及びそれによつて保證せられる計算の確實と云ふことに基く。

c 商品市場に於ける事物化、商品市場に於けるすべての原始的交換は、販賣者と購買者とが一緒になつて取扱はるべき商品を眼前にしてその契約を結ぶと云ふやうにして行はれる。財貨販賣の此の形態に對しては種々な名稱が存在するが、それはつねに一つの特性を示してゐる。斯の種の取引は相對取引、現場賣買、同地取引、英語で現場取引等と云はれてゐるが、佛蘭西語の“vente hors la main”によく對應してゐる「ハンド・カウフ」と云ふ言葉が最もよく事態を總括して示してゐると思はれる。此の語は我々がこゝで最高度に人格的な過程、手と手、眼と眼との取引の仕事の問題とするのであり、そこには此の種の取引が示すすべての特殊性が包含せられてゐることを物語つてゐる。

此のハンド・カウフは今や資本主義によつて遠地賣買に變形されるが、後者は遠隔の地に在る契約者達がひとしく遠方にある双方の商品の供給に關して將來に對して取引を結ぶと云ふことである。それ故遠地賣買は延取引とも云はれる。それが取引關係の事物化を意味することは明かである。

此の事物化は謂はゆる個人的延取引に於てその最初の段階に到達するのであるが、そこでは取扱はれる双方の商品は個人的に決定され、個人的になされた検査或は對照された見本によつてそれとして認められ、契約の諸條件も亦個人的に、場合々々により確定される。さて商業取引の諸形式がそれに従ふところの、そして斯の種の遠地賣買がさうした關係にないところの、事物化の過程が残つてゐる。即ち、發展は進み、事物化は一聯の新しい形成物によつて完成される。その最も重要なものを挙げれば次の如くである。

(1) 一般的延取引 これは個人的延取引から検査が型に乃至標準品に變化することによつて成立する。検査は一定の双方の商品を代表してゐたのに對し型は同じ商品の種類を代表する。その個々のもの乃至量は相互に代替しうるものである。斯かる同じ商品は主なる原料及び世界貿易の多數の半製品であつて、その種類としての性質は今や利益團體

〔取引所〕を通じて或は商慣習を通じて確定され、また種類検査(型)の中に表現される。

型乃至標準は種々な觀點のもとに形成される。例へば對象の機械的乃至化學的性質。其れは木綿、羊毛(一部分)、石油、コーヒー、砂糖、穀物(一部分)、油、木材、銅、鐵、支柱、プロフィール・アイゼン、一定の番手の絲等に對して存在する。

型の授けによつて今や商取引は最早一定の個人的な一對の商品についてではなく、代置しうる商品量(個數)によつて取り結ばれる。

原料取引及び段階製造品取引に於ける型の見本を完成品取引に於ける商標品(Marken-artikel)が形成するが、それは次第により多くの生産部門に採用される。例へば石鹼、雜貨、香水、藥品類、靴、帽子、自轉車、自動車、卷煙草、菓子、チョコレート、茶、エキス、酒、清涼飲料水。

一般延取引の普及によつて契約締結者の自由な採量が商品の質の規定について破られるとするなら、契約自由のより一層の制限が次のことによつて行はれる。

(2) 契約條件の定型化。これである。まづ第一に購買契約は益々統一的な・種々な「取

引所」によつて設けられた・契約の約束に従つて取り結ばれた、——特に國際的な取引に於てさうであつた。斯くてそのもとに供給がなさるべき條件は次第に統一化され型にはめられた。CF、CIF、FOB(船賃免除)は周知の定式である。最後に運送契約も亦同一の圖式化の過程に投ぜられ、個々の商品に對する統一的な貨物送狀或は大量財貨に對する統一的な積荷證書が發行せられる。これによつて商品は確定せる率の唯一の貨物證書を以て生産國の内地から丘を越え海や河を渡つて規定の場處に到達するのである。

事物化の最高の段階を次のものが示す。

(3) 狭義の定期取引。これは商慣習的の延取引であつて、そこでは契約を結ぶ者の恣意を免れてゐる。一定の分量及びその倍量(「期限」)に於てのみ確定せられるところの量に關する規定、一定の型(「定期商品」)によつて示される質に關する規定、月(最も早くは月の第一日、最も遅くは最後の日)でのみありうる引渡期日に關する規定、がある。

c 經營の事物化。精神化或は魂をなくすことの如き事物化そのものは經營の形成に際して特に明瞭に示される。資本家的經營に於ても心ではなく偏に精神が存在しなくてはならない。近代の經營はいはゞそれ自身純精神形象である資本家的企業に對して適した着物

を興へなくてはならない。比喩的ではなく云ふなら、近代經營の形成の意味内容はそこでは經營に於て現實となる資本家的企業の理念への接近が行はれると云ふことに盡きる。

だが如何にして此の精神化の過程が、心の精神ガイストによる代置が行はれるかを問ふなら、テイラーが次の如く云ふとき、彼は何ものをも豫想することなく、それに對し正しい答を與へたのである。曰く「從來は人格が第一の地位にあつた、將來は組織と體系とが第一の地位につくであらう。」人間の關係に代つて「體系」が現れる。いはゞその中に漏斗に於けるやうに注ぎ込まれて人間及び事物は落ち込む、そして通路と開閉器とによる機構に於ける如く正當な場所におしやられる。

規範の組織（管理組織）、數の組織（計算組織）、道具の組織（機械、装置の組織）、これ等はその中に精神が沈澱し、その授けによつて經營がたてられる三つの組織である。當然三つの組織は觀念の裡だけでは別々に相並んで存在するのであるが、現實には相互に交錯してゐる。我々はその本質を詳細に知らうとするのであるが、それはその構成をたづねるとき最もよく到達される。即ち

A 管理組織 その基礎は (1) 分解 で、即ちもともと複雑な（構成された）機能群

と労働作業との分解である。分解はさらに次ぎの三つの方向に於て行はれる。

a 種々な管理の専門への經營の分解。

b 水平的方向への労働の分割、此の過程は、すべての「品質化された」・より適切には心に結ばれた・労働の「品質化されぬ」・純機械的な・心を缺いた労働からの分離の中に存する。

心を缺いた労働の分裂は指導労働 (Leitungsarbeit) に於て始まる。以前職長自身が行つたところ（また行はねばならなかつたところ）の如何に多くが——蓋し以前はそれに對して特別の機能を行ふものが存在しなかつたから——今日從屬せる機關によつて行はれてゐることであらうか！ 今や指導者に對する命令を以て終へられる通信から初めて、彼がかゝはる幾千の處理に到るまで、また提議より以外のものには存しないがまた何等かの事務を形成しそして他の事務を遂行するところのものに到るまで、如何に多くのことがあらう。企業の指導者は今日ではボタンを押す人である。

機械的労働の驅逐は高等使用人の間に於ては引續き行はれてゐる。こゝにも亦心を興へられた労働を行ふ一人の管理者がたゞ「手」を一寸動かせばよい他の十人と並んで残存し

てゐる。技師からは屢々あたかも人の名づけたやうに一人の「線引き」(„Strichzieher“)が、商業傭人からは一人の模範労働者 (Formulararbeiter) が、仕事の親方からは自動機械が生成する。

労働の遂行に際し単純な労働と複雑な労働との分離は最も早くまた最も根本的に試みられてゐる。こゝでは製造業は既に本質的に労働の遂行を機械化した。だが注意すべきことは次のことである。即ち、最も簡単な企て、—— 鐵棒の荷下し、土の荷運び、選り分け、—— に於ても亦なほ心の残りがあると云ふことである。而して今や此の心の最後の残りを、従つていかなる個人的な決定をも最も簡単な遂行からも追放して仕舞つたと云ふことがテイラーの特別な寄與なのである。その労働への労働者のすべての心の共働は克服され特別の機能者に譲渡される。

水平的方向に於ける分業と同じ歩みを

直的方向に於ける労働の分割がする。即ち従來複雑な労働が一人によつてなされてゐた場合には今や多くの者によつて部分労働がなされる。而もそれは同じ程度で指導的労働、媒介的労働、實施的労働に對してあてはまる。

指導労働に於ては分化が既に大管理區域に於ける經營の分割によつてなされてゐる、即ち商人的支配人と「技術的」支配人とが別々に現れる。分化は個別指導から支配人原則への推移によつて進行する。様々な支配人がそのとき諸の機能をお互に頒つ。より以上の再区分は最後に (特に大きな商取引に於ては) 専門構成 (Ressortbildung) によつて起る。ついで種々な經營支配人、經營技師、下級役人にわかれた古き親<sup>ウエルク・マイステル</sup>方の諸機能の分解がなされた。

そしてさらにそこに實施的労働が分解された無限の部分操作が現れたが、それは専門労働者によつて遂行されるものであつた。

管理組織は労働過程の分解によつて準備せられる一方、それは我々がその建設に際し觀察して基準と稱しようとする第二の過程によつてまさしく本來創り出される。

(2) 基準 (Normung) これは次のやうな企圖から成立する。

a 場合々々によつて異なる活動を一つの「正常な場合」に平衡せしめること、それは最も単純な運動への解消によつて、即ち量化によつて起る。正常な場合が確定されるなら、それはさうしたものととして知らされ、保存される。「御参考までに」と云ふのがさうである。

それは次のことによつて起る、即ち、

b 諸の規定 (Vorschriften) の作成、これであつて、そこに正常の場合は書き記されまた意味せられてゐる。あらゆる定式、あらゆる手本、あらゆる規程は斯かる規定を含んでゐる。さうした規定は多くの場合、何か文字の作成或は紙及び地圖の色彩の如き全く少數の純象徴的な指示の中に存するか、他の多くの場合には何かテイラーの「指導票」と云つたやうな精細な教示を包含してゐる。——さてなほ次のものが残されてゐる。

c 圖式 (Schema) への個々の場合 (個別委託) の整頓、その圖式はまつたく統一的に中央部から經營の最後の局部に到るまで行はれるのであつて、何等かの場所で個々の機能を行ふものの恣意に委ねらるべきものではない。

此の基準の全手続きに於ける飛躍點は次の點である、——即ち全生産過程が——全體としてまたその個々の部分に於て——個々の場合に始められる以前に既に規定の完全な體系に精神に於て存在してゐると云ふことである。

我々は今や如何に管理組織が準備されまた如何に創られるかをみた。それが如何に施行されるかを述べるものが残されてゐる。それは次のことによつて起る、即ち

(3) 中央局から指示を送達すること、それであつて、それによつて労働過程はその強制的運動を自動的に制約する。その處置は全く一つの機構の姿に適應してゐる。その機構は完成してつくり上げられてゐるものであり、一つの衝撃を受ける瞬間に運動を始める。それはあたかも何か水の流れる唯一の場所を押し始めるやそこで百人もの労働者が製造を始めるヘルブルユンのシュロツスガルテンに於ける製粉所の仕事に似てゐる。

此の最後に述べたところによつてその内部經營の諸の處置が動いてゐる第二の組織は示される。即ち

B 計算組織、計算組織に於て經營は數の組織として現れる、その中にあらゆる處置は適合する。だがそれによつてまたあらゆる處置は規定されるのである。その完全に展開されたものに於てそれは三つの區別される部分を含む。

1 數字的事實の組織的確定。經營の諸の處置はこゝではたゞその數と云ふことについてののみ關心をもち、剩すところなくこのものの中に把握されねばならない。一つの數はつねに一つの大きさを表しうるのみ。觀察せられる三つの大きさは、重さ(長さ)、時間、及び貨幣である。あらゆる重さ(長さ)及びあらゆる時の繼續は一つの貨幣表現を有たねばな

らない。此の貨幣表現のみが終局的に計算組織の目的のために用ひられる。

すべての大きさが精細に規定せられたなら、それは單位に總括される。そのことは次のことによつて起る、即ち

2 計算 (Kalkulation) であつて、その目的は「生産、販賣及び管理の費用を、價格形成への基礎として、また特別の費用によつて組織される經營の統制への基礎として、確定すること」(ライトナー)である。

經濟遂行の成果に對する見通しを與へると云ふ目的へのすべての貨幣額の最後の總括はついで

3 簿記を企てる。それはそれ自體その存立の四百年の裡に一つの巧みな組織に發展してゐる。

C 器具の組織、そこに經營の諸の過程が事物化される器具の組織は、經營に於て用ひられる機械及び裝置の總體である。規範の組織と並んで器具の組織を區別することが必要であつて、兩者は労働者を強制的に一つの生産過程に整頓すると云ふ同一の目的を追求するものであるが、夫々異なる手段を以てこの目的を到達するのであつて、規範の組織はま

さに諸規定の組織を以てするのであるが、器具の組織は巧みな相互に交錯する機械及び裝置の組織を以て、云はゞ豫め建設されたものの組織を以て、その目的を達するのである。

三、資本家的社會の構造 我々は資本家的社會に於て三つの群の人間を區別することができる。其等の人達は自然に混同されるのであるけれどそれぞれ特殊の態度をとり相互に明瞭に區別される。即ち消費者、資本家、企業家、及び賃銀労働者である。資本家的社會に於ては「第三者」も亦、即ち資本家の群にもまた賃銀労働者階級にも屬しない、而もその消費者としての存在は資本主義の構成にとつて決定的なさう云ふ人々が生存してゐるか、それ故我々は消費者の群に或る地方の全人口を考察に入れ資本家的社會に於ける欲求形成一般を示す特殊性をば觀察せねばならない。これによつて我々は此處彼處で今日の社會秩序の經驗的事實の中に入り込み嚴密な意味での社會學的觀察の限界を越えることを強制されるのであるが、それは諸の關聯の理解にとつて損よりも寧ろ利益として感ぜらるべきものである。

## 1 消費者

高度資本主義の時期に於ける（最後の）消費者を特徴づけ、それを以前の時期に於けるものから區別するものは、1 それがすぐれて中及び小の所得をもつ人々であること、2 すぐれて都會人而も大都市人であること、3 彼等が愈々益々その欲求の形成に於て營業人（Geschäftsleuten）——生産者及び商人——に依存するやうになつてゆくこと、これである。

資本主義に固有な生産及び販賣の諸條件と結びついた消費者の斯かる特性から、また時代の一般的な生活様式から、今や資本家的時代に固有な欲求形成そのものが明かにされる。それについて次ぎに問題にされる。

斯かる欲求形成の第一の特徴を示すものとして次のものが現れる。

1 欲求の對象の屢々の交代、それは一方には欲求者を取圍む財貨の世界を屢々變化せしめようと云ふ欲求者の衝動から、他方には革命的な技術が彼をその中におく變化への強制から、起る。

資本家的企業家は我々の欲求の對象が不斷に變化することに生きた關心をもつてゐる。その故に彼は多くのトリックを發明したのであつて、それによつて彼は我々の意志に反し

ても新しい欲求の對象に移ると云ふことを強制する。斯の種のトリックの一つは今  
日完全に資本家的企業家の支配のもとにあるところの流行（Mode）である。

高度資本主義時代の欲求満足の上の特性は

2 個々の満足行爲の促進、従つてその短縮である。その事實については知られてゐる。我々は以前に用ひた六分の一或は十分の一乃至廿分の一の時間で道程を行く。ゲートは三時間食卓にゐたが、亞米利加のクラークは十分で食事をすする。長い煙管を吸ふと一時間もかゝるが、紙巻煙草は五分ですむ等。斯かる速度の早まることの結果は、同一の時間により多くの欲望が満足される乃至は屢々同一の欲望が満足せしめられる（私は多かれ少かれの時間の中についた欲望満足がその種類に於て同一であるものと假定してゐる）。欲望満足の強度化が起る。欲望満足がより急速に行はれるためには生産と運送とが同一の加速度を経なくてはならない。

欲望満足の領域に於ける斯かる加速度の傾向の根據は次のやうなものである。第一に今日の人間を速さに驅けるところのものは到る處擴がる時の價值に對する感情である。時は今日の人間にとつて高價な財である。それ故に「彼は時間がない」のである。ゲートは三

時間食卓にゐる「時」を有つた。紐育のクラークはそんなことをしない。それは彼がゲーテよりはもつとうまく時間を過ぎなくてはならないからである。第二に資本家的利害は直接に急がせる。消費活動の促進は資本轉化の促進であり、それは利潤の向上を意味する。第三に歩調は彼がその中に編み込まれる機構の行程によつて個人に對し強制せられる。私に地下鐵を利用しようとするれば私は上下に一定の時間の割合を假定しなくてはならない。高度資本主義の時期の間に欲求の形成が次第にとるところの最後の特性は次のものである。

- 3 欲求充足の集團化 即ち従つて欲求を「集團化」に充足する進みゆく傾向。欲求の形成の集團化は殆どすべての領域に於て行はれる。その最も重要なものは、
- a 教育手段、公の學校、圖書館、博物館の増加。
  - b 衛生法及び治療法、病院、精神病院、保養所の増加。
  - c 娯樂所、劇場、音樂會、映畫の増加。
  - d 宿及び休養、レストラン、ホテル、下宿の増加。
  - e 家庭設備、水、瓦斯、電氣の集團的配給の増加。

f 交通手段、鐵道、市街軌道、蒸氣船の増加、また郵便、寫眞及び電話の給付の増加。資本家的社會に於ける欲求の形成の方法が固有の特徴を示してゐるとするならば、そこに於ける財貨自體の性質も亦特別の刻印を帯びてゐる。高度資本主義の時代に於ける財貨欲求を特徴づけるもので特に次の如きものである。

1 労働手段に對する増大する欲求、即ち他の財貨の生産に役立つ財貨への増大する欲求と云ふことが擧げられる。

労働手段への欲求の増加の近代技術の中におかれたこれ等の原因になほ他の欲求の推移から起る特別の理由が来る、それは

2 粗末な商品への増大する欲求と云ふことである。粗末な商品、即ち價値の小さい財貨、大衆欲求品は、高い價値の精製商品に比してその生産に比較的大なる労働手段の消費を必要とする。それはその生産に手の労働を排除して多く機械的方法でなされると云ふ極めて見易い理由からである。——我々は

3 衣食住の領域に於ける輕易な財貨への欲求の増加をみる。

我々が斯かる欲求の推移の理由について問ふなら、我々は就中十九世紀の間に文明化さ



れた人類が經驗したところの住居の仕方の變化を考へねばならない。即ちその都市への増殖と都市の大都市への發展である。此の變遷は欲求の風習の都會化と稱しうべきものもたらした。そしてそれに輕易な財がより多く用ひられと云ふことは最も密接に結びついてゐるのである。我々の消費財への要求は別なものになつた、そして消費の目的が變化せしめられるにつれて便利であるとか美しいとか云ふことについても價值判斷も亦變遷した。

その聯關は明瞭に我々の眼前に在る。都會人のじつとしてゐる生活方法は昔の重い・炭水化物の多くかゝる・犠牲を許さない。彼の動きのある生活は刺戟物を要求し、肉の榮養を必要とする。我々の都會に於ける住ひは我々がそこに我々の「天幕」を掛ける空いた貸間となつてゐる。我々の家の椅子は家財運搬車向きにつくられてゐる。そしてひとしく我々の衣服に對する要求は、我々がよくつくられた道路と溫さのよく保たれてゐる部屋に住むやうになつて以來別のものとなつてゐる。我々は今部屋について語つたが、それに溫められた軌道は結びつけられてゐるのである。

疑ひもなく近代技術は輕易な消費對象への推移を本質的に促した。重い財貨が輕易なものによつて驅逐されると云ふ右の傾向と次のものは相似してゐる。それは

4 代替財(代用品)への増大する欲求である。代用のもとに我々は種々なものを理解することができるが、次の如きものであらう。

a 以前の材料或は以前の形式の代置で、質の惡化を伴はざるもの(代用品)、例、繩の鐵索による代置。

b 質の惡化、それは材料のそれであらうと、その加工のそれであらうとを問はない。一方製造の材料及び仕方がその間同一である場合もある。(單純な質の惡化)、例、食糧品の混ぜ物及びすべての工業上の安物生産。

c 材料及び形態の價值小なる代用品による代置(狹義の代用 *Surrogierung*)、例、食糧品では、コーヒーのニガナによる代置。工業生産品では、象牙或は角或は琥珀のセルロイドによる代置。形態の代用では、縫つた靴の打つた靴による代置。今日我々の財貨の世界の最大部分は代用品から成り立つてゐると云つても過言ではない。

だが財貨欲求の新形成に於ける資本家的經濟にとつて恐らく最も重要な特徴は、  
5 同形の財貨に對する増大する欲求であつて、これは欲求の齊一化(*Uniformierung*)への傾向である。

我々は其等を直ちにその因果的結合に於て觀察するとき、即ち、齊一化の個々の過程をそれと呼び起した理由によつて整序するなら、これ等の重要な現象に對し最も正しくあることができるであらう。

同形の財貨に對する増大する欲求は次のものである。

a 文化の結果（隨伴現象）である。特に我々の時代の經濟發展である。

まづ第一に趣味（及びそれと共に欲求の）一般的な平衡化が考へらるべきであるが、その平衡化は人間相互間の増大する商業取引（Kommerzium）によつて生ずるもので、欲求の文明化、或は非自然化（Entnaturalisierung）と稱せられうるものである。それは古き風習及び慣習の解體に存し、費用の統一化（地方的、地域的、國民的食物の廢止）、衣服の統一化（地方的、地域的、國民的服裝の廢止）、住宅（すべての地方的な多種多様な建築様式の都會的家屋の型による代置）、の中に現れる。

斯かる欲求の一般的平準化の一つの特殊の場合をひとが欲求の官僚化と稱しうるところものがつくる。これによつて官僚の増大する意義によつてつくられる欲求の統一化の傾向が考へられてゐるのであるが、此の場合の廣義の官僚には大交通機關の使用人、國家及

び都市公共團體の勞務に服する勞働者等も亦之に屬する。

消費の官僚化に似てゐる現象は我々の時代にひとしく急激に行はれてゐる消費のプロレタリア化であつて、それは大きな賃勞働層が購買者として現れることによつて成立する。

欲求の統一化へ導くその他の原因系列の一つは

b 消費（欲求充足）の増大する組織であつて、それは我々に周知の次の如き諸傾向の結果現れるものである。即ち欲求の集中化の傾向（その擔ひ手としての公共團體及び公共機關の増大）、その集團化並びに個々の企業の經營の大きさの増大への傾向、これである。それによつて行政官廳の中心點を構成しようとする施設乃至大企業を形成しようともあれ、統一的欲求の一大中心點が成立する。

從來觀察せられた二つの發展系列は他の努力の明かに目的とせられたのではない隨伴現象として財貨の増大する同形性を明かならしめるものである。今日我々は斯かる統一化は尠からざる部分

c 同形性に對する意識的な意志の結果であることを確定しなくてはならない。此の同形性への意志はすべての前資本家的文化には知られないものであつて、歐羅巴に於ては近

代諸國家の、その軍隊、紀律、秩序をつくり（「制服」！）、其等を現實の武器を以て裝備しようとする（口径！）努力の裡にその最初の活動に到達したものである。（詳しい叙述はゾムバルト『戦争及び資本主義』——立野保男氏譯述大同書院刊あり——についてみよ。）

だが漸く十九世紀に到つて斯かる合理的な國家目的の領域以外に住民の間にも欲求の形成に於ける斯かる同形性への意志が成立した。就中その意志は特に衣服に於て著しい形式の一致に到達し、「制服」<sup>ユニフォーム</sup>について語る事ができたアングロ・サクソンに於てさうである。だが他處でも、尠くも合衆國に於ては同形性への「衝動」が觀察せられる。あたかも十二人のギブソン・ガール或は十二人のジャズバンドの單位のやうに經營經濟學に關する同じの・だがそれぞれ異つた・十二冊の本がある。

だが我々の財貨の世界の同形性はその同形性と云ふことに最大の關心をもつ企業家がもともとそのを促さなかつたなら、恐らく實際にある程に近く大きくはなかつたであらう。眞實の企業家の念願には明るい未來像として次のものが浮んでゐる、即ちそれぞれ一つの欲望を——出來うべくんば多くの欲望を——同一形式の對象によつて満足せしめることそれである。斯くて私産業に於ける統一化の觀念の精神上の父祖である古きウイズワースは

一つの蠟燭と一つの光の大きさを夢みた、また有名なヘレラウに於ける「テイペン・シユミット」は一つの椅子を、ヘンリー・フォードは一つの自動車の型を夢みた等々。

彼等の夢はなほ實現せられてゐない。だが我々はその途上に在るのであり、急速にその歩みを續けてゐる。とりわけアングロ・サクソンの、特に亞米利加の企業家は最後の消費財の統一化のためのその闘争に於てすばらしい成果を實際に獲得した。即ちすべての領域、衣食住に統一的の型が出來上り、謂はゆる「商標品」が公衆におしつけられた。我々はあたかも流行の形成に於けるが如く、こゝでも全く企業家の關心に依存してゐる。企業家の關心は我々に我々がつけるべき靴、帽、外套の形式を規定するのであり、我々には全く少數の見本の間に選擇をすることが許されるに過ぎない。

6 財貨の世界の多種多様化への傾向、高度資本主義の時代に於ける欲求の形成について述べたところに對し、さらに斯かる傾向がまたあることを述べなかつたら、それは不完全と云はねばならないであらう。即ち、右に述べたとは反對の傾向である。それは不斷に新しい種類の消費財が現れること、而もまた此處彼處に於て趣味は分化すること、企業家の働き掛けは此の趣味分散の公衆の傾向を壓迫するだけ十分強くないこと、によつてつく

り出される。

## 二、企業家階級

完全な企業家は次の如きものである。

a 発明者、技術的更新のそれではなく、寧ろ生産、運送、及び販路の経済的組織に新しい形式のそれ。発明企業家として彼の活動は発明そのものと共に終らない。それは幾千倍にも活動せしめられねばならない。

b 発見者、企業家は新しい販路可能性について発見者となる。それは内包的にまた外延的にさうである。彼が場所的に新しい分野を彼の活動に對し発見するときは外延的にさうであり、彼が既に支配する領域に於て新しい欲望を発見したときは内包的にさうである。

c 征服家、企業家はその過程に現れるすべての障碍を打破する決断と力とを有つてゐなくてはならない。然し彼は多くの冒険を敢てする力を有つてゐる者の意味に於ても亦征服家でなくてはならない。彼はその企業のために偉大なものを獲得するため凡てのものを賭する。

d 組織家、組織とは多くの人間を成功せる効果ある活動に組合せること、人間及び事物を望むところの利用活動が制限されず現れるやうに組立てることである。ところでそこには非常に種々様な能力と行爲とが含まれてゐる。

第一に、組織をしようとするものは人間をその寄與能力について判定する、即ち澤山の中から一定の目的に適した人間を選び出す、能力を有つてゐなくてはならない。

次に、組織をしようとする者は彼の代りに其等の人々を働かさせる才幹を有つてゐなくてはならない、即ち特に（企業の大さが増大した場合）構成部分を順次に組織的に支配人の全活動から自己に引受けるところの人々を指導的地位におく才幹を有つてゐなくてはならない。

今述べた任務と聯關して次いで別の・尠からず重要な・任務がある。それはあらゆる労働者を彼が最大量の給付をもたらすことができる正しい場所におく、そして彼を一般に連れて來ることが豫め成就した後その給付能力に對應せる最大量の活動を實際に展開するやうにつねに勵ますと云ふことである。

最後に企業家は次のことを配慮しなくてはならない、即ち共同の活動に組合された人間

の集團を質的なまた量的な觀點で正しく組成し、そして相互に——假令多勢の斯かる單位を取扱ふにしても——最善の關係におくと云ふことそれである。これは最も合目的な經營形成の問題である。

だが經營組織は個々の人間の集團に對する事物的（即ち技術的）に正しい結晶化の點を巧みに選擇することではなく、地理的・人種學的・景氣變動的・特殊性へのひとしく成功的な編込を意味するのであつて、たゞに一の絶對的に最善の經營形成ではなくて、實際的により重要な形式であるが相對的最善の經營形成が存在するのである。

商人的機能をいとなむこと、商人たること（職業的な意味ではなく機能的な意味で）は儲かる事業を營むと云ふことであり、ベレネン 打算及び フエムハンデルン 取引と云ふ二つの活動を一つの共同の目的に結合することである。従つて商人は a 投機的計算者であると共に b 事業家、ヘンドレム 商賣人、商人でなくてはならない。

此の特殊な意味で商賣を營むことは或る商品（株式、企業、借入金）の賣買のために フエムハンデルン 取引することである。料理人と共に兎の毛皮の讓渡を「値切」るところの小行商人、ズボンの販賣のために一時間を田舎の荷馬車運送人に口説く古い着物を着た猶太人、は商

賣を營む（つねに此の特殊な意味に於て）。だがプロシアの「談判者」との會議の間の多くの日の中に特別に複雑な事情のもとに幾百萬の借入金を締結したナサン・ロスチャイルドも亦さうである。或は全ユニオンの鐵道會社と料金の規制のための一般協定のために協議せるスタンダード・オイル會社の代表者も亦さうだし、カーネギー及び彼の從者も、彼等が J・P・モルガン及びその從者と十億の價格でカーネギー事業の引受を商議したときもさうである。こゝに出て來るのは純粹に量的な區別であつて、事物の核心は同一である。すべての近代の「商賣」の魂は今や全く確かに必ずしも口頭でなされ眼と眼との結果のものであることを要しない フエムハンデルン 取引である。それはまた暗黙の裡になされうる。即ち販賣者が例へばあらゆる種類の人工的手段によつて差當つて公けのためにその商品の特徴を尤もらしくみせて、それを彼のところで買ふことを強制するときさうであり、廣告とは斯かる人為的手段を云ふのである。

つねに購買者（或は販賣者）が契約締結の有利なことについて確信することが問題となる。販賣者の理想は全人口が彼によつてあたかも推薦された品を購買することを以て最早重大なこととは考へなくなるとき到達される。また正しいときに最早それを獲得出來ない

なら恐慌に多くの人々が襲はれるとき（あたかも有價證券市場に於ける熱病的興奮の場合にさうなやうに）さうである。

關心をそそる、信賴をうる、購買欲を目覺す、斯かる頂點クライマックスの裡に成功せる商賣人の活動は現れる。實際、何等外面的な強制手段はなく、たゞ内面的な強制手段のみがあるのであり、また相手方が意志に反してはなく自己の決意から契約に入るのである。暗示は商賣人の活動でなくてはならない。内面的強制手段には多くのものがあるけれど、その詳細な説明は社會心理學に於て求めらるべきである。

必ずしも萬人が資本家的企業家の機能を果すことが出来るものでないことは明かなことである。彼はそのための「素質」をもつてゐなくてはならない。我々は従つて人間の間に一定の變形を「企業家性のもつ」と稱することが出来る。

企業家性のもつとは明白に理智的の意志的な天分と強い生活力ヴァイタリティをもつてゐて、資本家的經濟の建設者として現れるときは、物質的價值及び地上の仕事に於ける人間の努力に對し強い志向をもつてゐる、さう云ふ人間である。それは云はゞ「實際的の實行」である。すべての手工業的自己満足及び享樂的怠慢に對する如く宗教人並びに藝術家のあらゆる靜

觀的本質に對し相容れない。

種々な國民並びに同一國民の内部に於ても種々な社會集團が様々に多くの異つた高い素質の企業家型を示すと云ふことはありうることである。斯かる問題については『近世資本主義』第一卷八三六頁以下、『ブルジョワ』二五三頁、二六六頁以下及び『猶太人と經濟生活』に於て述べられてゐる。

企業のある又はこれの面が現れることにより、今や高度資本主義の時期の進行の裡に一定の企業家の型が作り出された、それは専門家フツハマン、商人カフマン、金融家フィナンマンの三つに區別される。

1 専門家は彼がその成果に達せしめようとする彼の生産物から出發する。それは使用に拘束されてゐる。此の拘束性はとりわけ發明企業に際して明瞭に現れる。（發明企業家は純粹な發明家とは企業家の天賦の混入によつて十分區別される）。發明企業家はその發明を出来るだけ大きな範圍に實施（當然販賣のためにもさうする）することによつて生活に役立たさうとする。専門家の利害及びその努力の中心には作業經營の組織がある。正しい労働諸力の創造と合目的な使用とに彼の主要目標は向けられてゐる。労働市場は特にそれを求める者の三つの市場の一つである。その活動に於て専門家は一延長的アインディメンシヨナルである。穿

孔的である。競争の三つの異なる可能性の中で彼は給付の競争への傾きがある。ひとは此の型を産業の將帥と稱した。

2 商人は市場の需要から出發する、そして彼が最も販賣可能性ありと考へる生産品の製造を決意する。彼は「將來をみる眼」(ピンナー)を有ち、それによつてありうべき欲望の形成を見通し、その欲望の形成をついで巧みな宣傳によつて援助する。理想的な商人とはそれに對してついで欲望充足手段をつくりだすさう云ふ欲望を創るものである。労働市場ではなく商品市場が彼の活動の主要分野であり、工場組織ではなくて販賣組織が彼の決定的な仕事である。商人は一延長的な専門家とは違つて二延長的に平面的であり、擴張的である。暗示の競争は彼の性向と能力とに對應してゐる。英語は彼を實業家と稱してゐる。

3 金融家は資本需要から出發する。特に取引所技術的方策によつて資本を創造し資本を組成することが彼の主要活動である。彼はそれ故三つの市場の中とりわけ資本市場を支配する。彼は發起事業、フュージョン、コンツェルン形成の裡にその生命を終へる。彼は特殊の偏愛を以て企業の建設をいとむ。彼は建設的に活動的であり、三延長的である。

彼は強力の競争を好む。アングロ・サクソン諸國、就中現今北米合衆國では金融家はコルポレイション・フィンナンシエと呼ばれてゐる。

三つの型は右の系列に於て企業家活動の進みゆく非具像化(Entkonkretisierung)を示してゐる。これ等の型が極めて稀な場合にのみ純粹に現れるのであつて寧ろ通例混合されて登場すると云ふことを特に指摘することは不要であらう。而も専門家と商人との間、商人と金融家との間に最も屢々混合は現れる。或る意味に於てこゝに述べられた系列の三つの型は時間的にも順次に現れる。純粹な専門家はどちらかと云へば、他の二者が一般に屢々現れる高度資本主義の時期より前資本主義の前期のものである。金融家は集中化の運動が經濟生活に於て擴大するにつれて益々重要なものとなる。

同様に、經濟の種々な領域は企業家の機能に對して種々な要求をなし、そしてそれ故に種々な型に對しても參與の種々なるチャンスを保證すると云ふことは自明のことである。精巧な機械學の領域に於て専門家が、大衆財の製造の領域乃至倉庫の經營に於て商人が、鐵道線の建設に於て金融家が、活動の機會を多分に有つてゐる。

ところですべての近代の企業に於て一つの新しい人間の型が形成される。その大體は次

の如くである。

1 人爲的な淘汰過程によつてその素質上經濟的エネルギーの最高の給付を理知的並びに意欲的觀點に於て展開することの任務を與へられてゐる人々が支配するに到る。

a 企業の民主化は次のやうな結果をもたらさなくてはならなかつた、即ち人口量に於ける企業家性のももの百分率が與へられてゐる場合、企業家の機能が貨幣所有の條件になほ拘束されてゐた社會よりはより多くの人間が企業家意志と企業家能力とを以て活動したと云ふことである。

b それによつて資本主義が次第にゲルマン的<sup>II</sup>猶太的な事柄となつた資本主義の重點の人種的推移によつて明かに、より強い企業家の天賦をその中に含んでゐる人種 (Volkstämme) が前面に出て來た。ゲルマン人種は資本家的精神の展開に對して企業的前進衝動と共に、「手腕的なもの」、強靱な勤勉、建設的・建築的・素質を、猶太的人種は大きな經營性、投機的な直覺力、強い計算性、感情移入能力、進歩欲をもたらした。

c 植民を行ふ人々は一つの精力淘汰を示し、その本質上新しいものへの努力に適合してゐる。

2 我々がひとしく既に確立する機會をもつた新しい經濟指導者の機能の群の新しい規制は、今や上述の如き仕方では淘汰された企業家の内部で各々のものはそこで彼が最大量の給付をもたらさうとするやうな場所につくと云つたやうな結果をもたらした。

a すべての副次機能の分離によつて企業家活動を専ら養成することは可能となる。「純粹な」企業家が活動するに到る。

b 諸機能の専門化によつて特殊な才幹が特殊な活動をするやうになり、訓練と熟達とが給付能力を高める。

c 管理人の仲間の間の協同は個々人の給付を促し、全體の給付を高める。

3 新しい人達に於て世界的に新しい方向決定が行はれる、それは彼等がものにしたものであり、資本家的經濟の埒内で最高の給付をもたらさうとするものである。外面的に猶太教的乃至基督教的に「敬虔」な状態を續けてゐる企業家の仲間に於てさへ、今日なほ古い信仰による企業家活動の何等か本質的な影響を假定するなら、それは笑ふべきことである。古い信仰は全く日曜日の仕事となつて仕舞つた。日常生活は寧ろ全く以て新しい精神態度によつて規定されてゐる。生活の營爲が純自然主義的に、衝動的に形成されてゐる。



い場合——今日通常さうだと考へるものであるが——、従つて營利衝動、權力衝動、活動衝動が行爲を規定しないで、寧ろ何等かの規範的な・超個人的な・規制が根を下してゐる場合、資本家的企業家への影響を與へる觀念はとりわけ次の如きものである。

a 進歩への信仰、これは恐らく公益への奉仕を行ふと云ふ觀念へまで成長するところの經濟的擴張の人道的使命への信仰である。此の最も重要な宗教に代つたものから次のものが續いて生じる。1 效果への意志、即ち經濟的大効果を獲得しようとする努力、また例へばトラスト王から小僧に到るまでの亞米利加人に本來的であるところの心の調子、2 搖がすべからざる樂觀主義、3 一つの義務意識、それはこのものが屢々さうであるやうに次のものから生じない限りさうである。

b 特別な・近代市民的の資本家的・義務概念の形成、實際のところさう云つたものが存在する。それはもともと實際宗教的に基礎をつくられてゐたのであつたが（こゝにいかにも近代職業倫理と確證の信仰との間に聯關が成立する）、久しき以來成り上り者のルサンチマンと良心を満足させる努力とから形成された基礎に基いてゐる。この基礎は給付價値の強調、さうしたものであるとしての労働の過重評價、地上の福祉の唯一の源泉としての労働

の承認に存する。功績はそれが辛い労働に基いてゐる限りにおのみ功績として認められる。

「労働は市民の誇り

祝福は努力の價格」

此の義務説の中に告げられてゐるものは全く歐羅巴の亞米利加的、詳しくは北方的理想である。そしてそれは近代資本主義はブルジョワ化の過程に於ても最も早く適應性を示した北方人種の中にその根源をもつと云ふ我々によつて既に認められた事實と一致する。

c ところで近代の經濟人の行爲は全く非カント的な仕方ですこしも義務意識によつてのみで動いてゐない、却つて、變に聞えるけれどまづ愛によつてゐる。素より愛の特有の變種、即ちその事業に對する愛である。心理學的に我々は此の精神的態度の倒錯を次のことによつて説明しなくてはならない、即ち企業家の心の裡に労働の過度及びとりわけ他の何物への時間をも與へないところの事業上の事物にかゝはることの過度の結果すべて爾餘の側面が害はれて仕舞つて、その結果自然、藝術、文學、國家、友、家族が何等の刺戟を與へることができず、従つて彼を護り暖め生命を與へる世界から出るや否や堪へられぬ空虚と荒寥の感に囚はれることとなることである。これに反し此の事業の世界に

彼は彼を清新にし元氣づけ祝福するすべてを見出すのであり、彼はそれを彼の眞實の故郷、そこから新しい力を汲む青春の泉、渴死するものに新に生命を與へる源泉として感じるのである。彼が此の世界に結局彼の愛を亦捧げるのは不思議ではない。そして近代經濟人の裡に行はれる此の過程によつて經濟生活に他の何ものによつても解き放つことのできなかつた充實した生の精力が送られると云ふことに不思議はない。經濟有機體が義務意識から流れ出る苦痛の意志によつて動くのみならず、近代人がなほ有ちうる全くの愛がその中でその生産的な仕事をするに云ふことは資本家的本質の展開にとつて測るべからざる大きな意義をもつてゐる。

### 三、賃銀労働者階級

賃銀労働者階級は資本家的經濟の必然的構成要素をなしてゐる。資本家的經濟は賃銀労働者なしには存立しえない、そして賃銀労働者階級を増加することなしには擴大することは出来ない。だが賃銀労働者階級はさうしたものとして何等（經濟）階級を構成しない。彼等は思惟必然的に特定の經濟體制に關心をもつものではなく、社會主義的な賃銀労働者も資本主義的なそれもあるのである。

賃銀労働者階級は極端に分化してゐる。相違は非常に種々な觀點から生じる。分化の機縁となる最も重要な目標は次の如くである。1 年齢及び性別。即ち少年、青年、成年、と男子女子、2 人種。即ち白色、あらゆる種類の有色、3 民族性。種々様々に異つてゐる。4 仕事の部門。農業、工業、商業、運送、個人的勞務等、5 經營に於ける階層。即ち、使用人、労働者、補助員、6 仕事の種類。有資格、熟練、不熟練、機械、手工労働者、重工業労働者、輕工業労働者。くはしくは *Handwörterbuch der Soziologie* "Arbeiter" の項目を（こゝ）にみよ。

賃銀労働者階級を示すために「プロレタリアート」と云ふ言葉も用ひられ、それは多くの意味を有つてゐる。此の概念については此の辭典のその項目で詳細に述べられてゐるのでこゝには立ち入らない。（それはブリーフスによつて擔當されてゐる……引用者）

以上の如きがゾムバルトによる資本主義の説明であるが、前章で述べた如き彼の方法論的缺陷はそのまゝこゝに擴大再生産されてゐる。それは殆ど資本主義精神論とも云ふべきものである。右の他ゾムバルトはセリグマン編纂の『社會諸科學百科辭彙』に於ても「資

本主義」の項目を擔當しほゞ同様な説明を加へてゐるが、そこでは彼をして有名ならしめた初期資本主義 (Frühkapitalismus)、高度資本主義 (Hochkapitalismus)、後期資本主義 (Spätkapitalismus) の説明をしてゐる。それは彼によればほゞ十三世紀から十八世紀の中葉、十八世紀中葉から一九一四年の世界大戦まで、第一次世界大戦以後の時期、を指すもので、その第三の時期は謂はゆる統制經濟の段階に相當してゐる。——因みに此の第三の時期に關してはゾムバルトに、"Zukunft des Kapitalismus", Berlin, 1932. (鈴木晃譯、世界大思想全集・第九十八卷)なる小冊子があることは周知の如くであり、統制經濟に關しては高宮晉、「計劃經濟の論理」(雜誌理想第七號昭和十五年四月號)參照。私はそこに述べられてゐる如く「統制經濟機構は新しい經濟機構として、資本主義經濟機構とも異り、また、社會主義經濟機構とも異るところの第三の經濟機構である」ことは斷じてないと思ふ。私有財産制と營利原則とが認められてゐる限り、その經濟の性格は決定されてゐる。さてゾムバルトの資本主義の概念規定に對してはそれが二元論であることが夙にカール・デュールによつても指摘されてゐる如く、明かにそこには生産手段の所有者と單なる生産者との二つの人間集團の對立關係と經濟精神と云ふ二つの要素が固定化されてをり、

後者が前者を支配してゐる。即して彼によれば歐羅巴的魂の深き根據から、即ち新しい國家、宗教、科學、技術を生んだその同じ精神が資本主義を生んだのであるが、資本主義は單に無限の欲求、權力意志、企業精神によつて創られたのではなく、それはさうした企業精神と秩序と保有とを意欲する市民精神との合成果で、さうした資本主義精神が資本主義を創つたのである。資本主義はさうした精神がそれ自らを實現してゆく過程と考へられる。ところで彼の不幸はその經濟體制(精神、組織、技術)が恣意的な契機のばらばらな合成物であつたに對應して、その資本主義なる概念も亦統一を缺いた散漫なものとなり了つてゐる。

ゾムバルトは云ふ、「巨大なる貨幣蓄積と雖も未だ以て資本主義的企業の單なる企劃に對してさへ充分なる前提條件では決してない。却つて斯かる蓄積された貨幣額を資本にまで轉化せしむるためにこのものに附加へて財産ある經濟主體の裡に現れなければならぬものは、その所有者の特に資本主義的なる精神である。」と。だがこれに對しては、周知の如く資本主義的企業の時代に觀察せられる營利的欲求は中世のそれから果して本質的に區別されるか? と云ふゲオルク・フォン・ベロー (G. v. Below, Probleme der Wirtschaftsf-

Geschichte) 及び、營利的欲求は人間の本性に深く根ざしてゐるものであつて不変であり、資本主義の經濟時代に至つて初めて現れるものではないのではなからうか? と云ふルヨ・ブレンターノ (L. Brentano, Die Anfänge des modernen Kapitalismus) を代表とする批評が存在する。ゾムバルトは右の如き第一の批評に對し、經濟行爲が或る時は經驗的、情緒的に、或る時は合理的、理智的に行はれると云ふことは決して程度の差ではなく、假りにそれが程度の差であるにしても、それはやがて本質的相違たりうるものであるとする。そして第二の批評に對してはあらゆる人間の歴史に於ける不變なるものを把握し記述することは確かに一つの魅力ある課題であるが、歴史家の任務はつねに特殊的なるものを把握するにありとする。此の論争を確定するものは素より現實の經濟生活の具體的探究以外にありえないが、我々はウェーバー、ペロー、ブレンターノ等の研究から謂はゆる營利的精神が古代、中世にも存在したことを、財寶に對する欲求に東洋諸國の傳説にも窺れることを確證することが出来るやうに思はれる。斯くてディールも「營利衝動と利潤慾とは決して資本主義の原理的特徴ではない」(理論經濟學・第二卷・二八一頁) と云ふのであつて、このことはさらにゾムバルトに於て資本主義精神は踐民的なもの (大塚久雄、資本主義精神起源

論に關する二の立場、經濟學論集第九卷第四號參照) と考へられ、その擔ひ手として善良なる小商人乃至惡辣なる高利貸が考へられるのであるが、それは即ち資本主義精神を資本所有とは切り離して取扱つてゐるものと云はねばならない。斯くてゾムバルトに於ては資本主義の發端は十三世紀の初頭にまで溯られるのであるが、それは寧ろ法制的に市民的自由權の確立期に立ち求めるカール・ディールに如かないであらう。また經濟精神が經濟生活を生むのか、その逆ではないのかと云ふことがゾムバルトについての問題として殘される。彼に於てはつねに人間とその精神とが歴史の推進力なのであつた。然し彼の觀た人間は精神そのものに他ならず、斯かる主觀的立場に對しては當然、人間はつねに一定の具體的な社會關係の中に編み込まれて存在してゐるのであり、窮極に於てその基礎的構造に依存するものであつて、人間のすべての精神形態は、斯かるものとして規定されるのであり、資本主義精神も亦特定段階に於ける社會經濟的構造によつて規定されんとする客觀的立場が存在すること云ふまでもない。而して斯かる客觀的立場は、例へば田邊元氏の哲學の如き立場からも十分認めえられるところであり、ポレにせよ、ディールにせよ、またクムプマン (K. Kumpmann, Kapitalismus u. Sozialismus, 1929.) にせよ、ゾムバルトを問題とした諸

家の何れもこれを指摘したところである。(上述したゾムバルト批判に關しては、横濱市立横濱商業専門學校研究論集第三輯並びに第四輯の小原敬士氏の論文を参照)

ともあれ資本主義は商品生産が一般的・全面的に支配し、労働力の商品化が行はれた社會であると考へられるが、それは如何なる意味に於て存在するであらうか。

例へば杉村廣藏氏は云はれる、「實際かの世界經濟なるものは、各國民の經濟社會が、それらの時期に示した資本主義經濟の高度なる發達を方向上の同一性において理解した一種の社會學的形像であつて、現實を超えた構想態ともいふべきものであつた。かく高度資本主義が諸國家を超越する世界像として迎へられたところに、國民社會の歴史的特殊事情をもつて普遍的公式を歪曲するものだとする見解も生れ出た。これは資本主義機制的認識を主眼とした古典派經濟學の理論をそのまま社會的現實に擬したものとといふべく、近世經濟學がもともと國家をはなれた經濟社會を描き出さむとしながら、當時なほ國民經濟の充實を見なかつた爲めに、資本主義經濟の一般公式を中心として世界像をつくらざるを得なかつた結果である。」(同氏、經濟倫理の構造、二四五―六頁)その他「文化類型學」なるものを提唱される高山岩男氏に於ても同様な主張がみられる。(同氏、世界史の理念、思想、昭和十五

年参照)高山氏はマックス・ウェーバー的手法を用ひて、「眞實の個性認識の立場は、公正妥當なる類型『資本主義』を構成し、それを基準として、古代資本主義・中世資本主義・近代資本主義の一回的・唯一的な個性の把握を試みる立場である。個性は一般性と特殊性との綜合である。個性の認識は一般的法則性の認識と特殊的唯一性の了解との綜合を以て完成する。そしてこのやうな一般的法則性の客觀的認識を媒介するところに、史學的認識が單なる物語と異なる學問的知識たる所以が存するのである。この意味で史學的認識の學問性を形成するものは、一般に精神科學的な類型的認識に存するといつてよい。」(五七四頁)と云はれる。また別に「ヨーロッパの世界史が古代世界史と西洋世界史との二つより成り、従つて二度繰返してゐると見るのは正しいと思ふ。私は根本的にはこの見解に賛意を表するものである。けれども、それと同時に兩世界史の交錯もまた十分に考へられなければならぬ。西洋世界の自律的發展と古代世界との聯關が結びついて、西洋の世界史は成立するのである。」(五六―一頁)と。――右の如き主張の根柢に潜むものは兩氏何れにせよかの個別的・特殊性の問題である。即ち各國民經濟が個性をもつてゐると云ふ事實が兩氏の念頭にあり、それが壓倒的となつて法則的なものの認識を歪めてゐるのである。實際に杉村

氏の云はれる如く英吉利古典派經濟學はしかく單純に世界經濟的なものではなく、資本は英吉利資本としてその特殊性を有つてゐたのである。(岸本誠二郎、國民經濟、國際經濟、自由主義、「新興科學」第二卷・第九號參照) 右の如き解釋はゴットルのリカルド解釋に相通する素人的謬見である。それは經濟學がポリテイカル・エコノミーとしての學問と云はれた理由を正當に認識してゐない。また高山氏の所見に對しては先づそのウェーバー的見解が批判されねばならないであらう。類型による認識を云々されるが、その類型はウェーバーに於ては單に手段、道具であつた。社會科學的認識(因みに云ふ、論者はこゝで精神科學と云ふ言葉を用ひてをられる。その他文化科學、人文科學等の語を用ひる人も少くない。だが自然科學に對して我々は何故社會科學と云はないのであらうか。社會と云ふ語が我が國に於て永久にタブーであつてよい筈はない。)は道具であつてよいわけはない。否、客觀的にさうでありえないのである。それは歴史的大衆に擔はれてゐるものである。而して論者は個性の認識には特殊的唯一性の了解が必要であると云はれるが、それはその歴史性に於て認識すると云ふことを意味するより他なく、こゝに論者の歴史學派的・浪漫的・審美的・世界觀がほのみえてゐると思はれる。社會は、そして精神も亦、自然に媒介され

たものとしてのみ存在してゐる。而して論者に於てみられたやうな個別特殊性をもつた自然——それは或は人種であり民族であり地理的環境である——は、それが一定の社會的狀態を通してその社會の構成員に影響を與へる限りに於てのみ問題となるのであり、その影響を受ける人間は決して單に之を了解し享受して止むが如きものではなく、却つて積極的に之に働き掛けるものであることが忘れられてはならない。そこにはじめて社會があるのである。上述のことはだが我々本來の問題に對する緒口であるに過ぎない。即ち高山氏は公正妥當な資本主義の類型を構成することを要求されると共に、資本主義を古代にもまた中世にも存在するものの如く考へられてゐるが、それは同氏が資本主義をなほ資本主義精神に於てみる考へ方に暗黙裡に左袒してをられることを物語るものではないであらうか。それは却つてウェーバーの意圖を裏切るものであると共によく歴史的社會の「一回的・唯一的個性の把握を試みる」ものとは云はれないであらう。蓋し資本主義はその成立の前提條件として大資本の集積と共に多數の自由労働者の存在を絶對に必要とする。後者は中世の同業組合に於ける徒弟の過剩、封建的な大土地所有と封土關係の解消、宗教的改革による寺領の消滅、商業資本の擴大による土地買占、土地圍込運動、の如き歴史的契機によ

つて發生したものであり、前者は謂はゆる本源的乃至原始的蓄積として知られる商業資本並びに高利貸資本の蓄積であるが、それも亦歴史的なものである。商業資本高利貸資本は古代中世にも存在した。然し資本主義成立期のそれは一つの特徴をもつてゐる。即ち、第一は豪奢なる大公、本質的には土地所有者に對する高利貸附、第二は自らの勞働條件を所有する小生産者、即ち手工業者、殊に農民に對する高利貸附である。斯くて大資本が形成されるが、此の行程が如何なる程度まで近代歐羅巴に行はれた如く舊來の生産方法を廢除することになるかは全く歴史的發達段階とそれに隨伴する事情とによる。而も斯くして成立した資本主義は千八百七、八十年以來獨占資本主義として世界的規模に於て我々の現實の問題として存立してゐる。個別特殊性の論者は資本主義が存在するのではなくたゞ個別特殊性を有つ各國民經濟が在るのだと主張するのである。

ともあれ資本主義と云ふものを取り上げた場合それを資本家階級及び勞働者階級と云ふ人間の問題として取り上げてゆくことが正當な途であると考へられる。そしてそれが資本主義社會の解剖の學問としてケネー、スミス、リカルドによつて展開された經濟學の正道であらう。前者は十七世紀、十八世紀及び十九世紀初期の佛蘭西の手工業や小マニユアラ

クチュアの親方と職人との關係からその特殊な社會的意味をもち來つたもので元來中世のボロー (Borough) の成員を示す言葉であるとして知られてゐる。(Cf. Art, Bourgeoisie by Carl Brinkmann, in Encyclopaedia of the Social Sciences.) 斯くて機械生産の發展と共に明かな社會的對立が後者との間に生じ、またも一つの對立としてモリエールの劇に描かれた如きものが生じた。英佛に於ては貴族と商工階級との橋渡しが根本的に相違してをり、農民、職人、勞働者の列からブルジョワ的商人製造業者の地位を経て土地所有の、また政治的行政的貴族の地位に到る中産階級の一系列、これが即ち上流、中流乃至大ブルジョワ、小ブルジョワの觀念にかゝはるものである。前者については蓄積的節約、消極的には貪慾が、後者については獲得的また組織的才幹、消極的には搾取が指摘されるが、實際には兩者は混合して存在してゐる。これに對し社會主義並びに保守主義の側からいたく攻撃がなされてゐるが、エリザベス時代の冒險者によつて示されるその初期、また十九世紀から廿世紀にかけての産業王の時代は小さな高利貸や市民權以上のものを有つてゐた、とプリンクマンは辯護する。ともあれ英佛の個人主義、獨逸の封建主義、亞米利加の傳統なき自由主義、と云つたやうにその色彩があり、また各歐羅巴諸國のブルジョワの各集團の間には例へば

ユダア系にみられるやうに事業關係には人的關係が加つてゐる。而して資本主義の發展が多くの新中産階級を生じたことは云ふまでもないが、インフレーションの過程はこゝにもまたその分化の過程を示してゐる。

文化的にブルジョワは中世の宗教的社會を諸々の文化價値の社會に分解したのであり、マックス・ウェーバーの説くプロテスタントの倫理と資本主義精神の關係の指摘は正しい。佛蘭西革命前の彼等の役割は云ふまでもないが、佛蘭西には多くのカトリック的なものが残り、また佛蘭西のそして或る程度まで英吉利の藝術・文學はその國のブルジョワの政治的勝利に先立つ時期にその頂點に達し貴族的性格を示してゐるのに對し、獨逸の文化は全く十八・九世紀の中産階級のもので他國に比し學者官僚はそれを授けた。而してこれ等の文化に對し勿論相對立する側に文化が成長しつゝある。

然らばさうした文化は如何なるものであらうか。それは生産、職業を媒介として形成されつゝあると云へる。職業とは勿論一般的に云へば人間が或る特定の經濟的活動に繼續的に従事することによつてその生活資料を獲得することであるが、それは社會的乃至技術的分業に基いて各人が一定特殊の労働部門に限定されてゐる状態と考へることが出来る。然

し乍らそれは技術的觀念ではなく、専門化としての分業と同一視することは出来ない。即ち職業は資本主義社會と共に發生した歴史的觀念である。謂はゆる封鎖的家内經濟の時代に於ては人々は主に自給自足の生活を営み、或る個人は繼續的に或る特定の生活資料獲得のためにのみ労働することはなく、當然職業は斯かる時代には存在しなかつたと考へられる。封鎖的家内經濟の發達と共にそこに特殊の技術にすぐれて専ら労働にのみ従事するものを生じたが、それは未だ決して獨立の經濟主體ではなくそれは職業ではなかつた。生産力の發展によつて封鎖的家内經濟から必要以上の餘剰生産物が生じてそれが規則的に交換せられるに到つて獨立の生計の營まれる可能性が生じ、各家内經濟もその必要とする一切のものを自ら生産する必要なく専ら特殊の生産に従事することが出来るやうになつた。斯くて農工商等の産業部門が生じ、資本の發展と共にさらに從來同一の生産者によつて生産されてゐた種々の生産物が夫々別の生産者によつて生産されるやうになり、また從來同一の生産者によつて生産されてゐた一つの生産物の生産過程が分割されてその各部分が夫々専門的に生産されるやうになる。資本主義社會は斯く、社會的分業の成立、社會的分業から技術的分業への轉化、技術分業の絶えざる分化、此の分化によつて促される社會的分業



の分化と云つたやうに編成される。そして職業が職業である所以は、生産手段を所有するものとせざるものが分化・対立し、前者の支配に對する無條件的服従と後者が一つの部分作業に對していはゞ生涯固定的に限定せられてゐると云ふところにその特徴がある。而して此の職業に對し、これを職能或は職分としてみる考へ方と、これを天職としてみる考へ方と、これを營業としてみる考へ方とが生じる。職業を以て職分或は職能とみるのは有機的職業倫理であり、これは中世的原理に基くものであつて、紛れもなきフアシズム的思想である。ギルド社會主義、サンジカリズム、ポリシエヴィズム等何れも此の思想を社會的規模に於てとりあげたが、若し個人としての立場から單に職業を以て全體のための職能として之れに安住するならば、それは結果としてはたゞ職業についてゐさへすればそれでよいとする卑俗な考へ方に一致する。これに對し職業を通じて現世にプロテストすると云ふことこそ新しい經濟倫理の内容となるであらう。ところで歴史的にはマックス・ウェーバーが指摘したやうに天職としての職業觀と營業としての職業觀とは一致してゐたであらうけれど、資本主義の進展と共に兩者は對立するに到つてゐる。資本家階級の機能喪失はかの笠信太郎氏の『日本經濟の再編成』にも明瞭に現れてゐる如くであつて、今日營業

としての職業觀は殆ど存立しえない。それは完全に政治化されてゐる。職業を以て天職<sup>ベリフ</sup>とみる考へ方は職業に個性乃至自我の實現をみるのであつて、禁欲的職業倫理の説く如く諦めて身を生活資料獲得に委ねると云ふのではなく、積極的に現世の闘ひの場として職業を考へるのであつて、その職業についてのヴェテランになることが要請されると共にその職業を媒介として輿論を發生せしめると云ふことがその職業倫理の内容になる。即ち或る職業について専門的・技術的に通曉することと共にその職業の改革のために働かねばならない。斯くて休養すると云ふことも明日のよりよき労働のための經濟倫理の内容となるのである。云ふまでもなく事業の繁榮ではなく事業のよくなることが經濟倫理の内容でなくてはならない。我々は夫々の職業のヴェテランを多くその支持者に有つてゐるか否かゞ一つの政黨の實行力を決定する契機となることを忘れてはならないであらう。斯くて謂はゆる職業病なるものに對して一々夫々の産業の状態と引合せてこれを解決してゆくが如きこともまさに事態に即した經濟倫理の内容である。新しき文化の地盤は斯くして生成する。なほ職業について述べべきことは、資本主義以前の社會に於てはその生活資料獲得の営みは直ちに社會的な地位身分の差と結びついたけれど、近代社會に於ては職業別によるさ

うした差は殆どなくなつて、階級別が重要性を占めるに到つたことである。近代社會に於ては技術の進歩によつて職業の修得は短時日ですむやうになり、また職業選擇の自由と共に失業等による職業轉換の可能性も亦増大した。また例へば中世の社會に於てさうであつたやうに一定の仕事に従事してゐることによりその地位が一定の約束によつて上つてゆくと云ふこともない。謂はゆる新中産階級たる俸給生活者層やまた零細農民、小農、中農、大農、大土地所有者等の農村の生産關係も資本主義の進展と共に階級分化の日程を経るよりほかないのである。(職業については Arthur Salz, Occupation in Encyclopaedia of the Social Sciences を参照。文獻もそこに載せられてゐる。M・ウェーバーを『何を爲すべきか』の著者と對比することは興味あることである。)

アルフレッド・モイゼルによればプロレタリアートとは法律的にまた經濟的に自由な労働者階級で、賃銀をうるために資本家的企業家に對し、一定の時期その労働力を賣るものである。此の概念は熟練、半熟練、不熟練のすべての資本家的企業の被傭者を含むものであるが、技術的、監督的、執行的業務を營む小ブルジョワ及び半プロレタリア階級を含まない。そして本來工業労働者階級を意味する。モイゼルはマルクスやゾムバルトによりつ

つ原始的蓄積の過程を歐米を對比して描き出し、二つの階級の成熟の過程を述べてゐる。そして労働力の商品としての特殊性、即ち機械、技術的進歩によるその影響、失業、家族の解體等を説き、社會保守主義(シスモンディ)、マンチエスター主義、社會自由主義(超過利潤を地盤とする改良主義)の觀念形態を説明し、當該階級の政治運動の過程を説いてゐる。若干の異議を容れる餘地はあるにしても、このモイゼル執筆の項目はよく出來てゐると云へる。(Art "Proletariat" in Encyclopaedia of the Social Sciences.)

フリーフスの著 *The Proletariat, A Challenge to Western Civilization*. 1937. はもと "Grundriss der Sozialökonomik" に收められてゐたものであるが、佛譯されさらに英譯されたもので、フィアカント編纂『社會學辭典』の同項目の所論もそこに入つてゐる。著者は十九世紀が自由の問題に當面したやうに廿世紀の問題は <sup>オーガニゼーション</sup> 組織の問題であるとなし、「社會諸層間に於ける役割と機能配分の正當なる秩序向け」(序言)を以て組織の根本命題と考へ、これをプロレタリアの個性再建と結びつけて新しい社會秩序を考へようとする。第一章では "Mercenarii pauperes sunt" から近代産業社會のプロレタリアートまでと云ふ表題で近代労働者階級が單なる貧民と如何に區別されるかをその工場生産の發

生による集團化と云ふことから説き、第二章ではプロレタリア身分の資本主義的基礎と稱して、彼等が中世ギルドのジャーニーマンとは異つてその子孫と共に生涯その階層にとゞまらざる所以を述べ、第三章社會經濟的用語に於けるプロレタリアートの概念では彼が人身の自由をもつてゐること、而もその唯一の収入は不安定な労働市場にその労働力を賣ること以外にはない賃銀労働者であること、従つてその自由も特定の社會關係に適應したものに限定されることが説かれ、資本主義の前提条件でありまた歸結であると述べられる。それは客觀的な集團で一定の心理を有つてゐる。貧乏と云ふ概念は主觀的・相對的なものにとゞまる。第四章倫理心理的用語に於けるプロレタリアートの概念、こゝでは、財産の所有、「生活手段」の蓄積、利用、享樂——これ等の價值はその性質上大多數の民衆が極めて限定された度合にしかものにするのできないものであるが、労働〔力〕が市場の商品として扱はれ、私有權が當然のこととして認められ、大規模な産業が行はれる場合特にさうである。經濟的價值が眞實なるもの・絶對的なものと扱はれるとき、此の見解がブルジョワ階級に倣つて下層階級に受け容れられるに伴つて當然これ等の特權をもつものと然らざるものとの間に對立が生じて來るのであつて、現代の資本主義に存する社會的裂

目の倫理的・哲學的基礎はこゝに見出される、と説かれ、階級意識と云ふことがその存在の條件にあげられる。但しブリーフスによれば現在のプロレタリアについての社會不安の一部は「プロレタリアの魂に於ける宗教的缺乏」(四九頁)に求められる。また著者によればマルクス主義が唯一の當該階級の觀念形態ではない。斯くて第五章社會・經濟思想史に於けるその觀念に於ては、その言葉が子孫を養ふものと云ふ意味を以てラテン語から起つて來たことを述べ、リカルド、マルサスの如き經濟學者にも、サン・シモン、フーリエの如き空想的社會主義者にもその觀念のなかつたこと、たゞシスモンデイにその多くの敘述がみられるがなほ彼の分析したものは労働を支配する貧窮パウペリズムにとゞまり未だ階級の觀念なく、ペクルルに於ても大差なく、ブルードン、カペー、ルイ・ブランにもみるべきものなく、アドルフ・グラニエ・ドゥ・カサナツクに到つて階級としての對立の問題が漸くとりあげられ始めた。獨逸に於てロレンツ・フォン・シュタイン、マルクス等によつて問題は正當にとりだされたが、その先驅者としてロバート・フォン・モールがあげられ、シュタイン、エンゲルス等の影響を受けたハインリッヒ・ウィルヘルム・ベンゼンの著も逸することはできないとされる。シュタインについてはなほ貧窮パウペリズムをプロレタリアの概念に結

びつけてゐる點に時代の制約があり、階級の存在と階級の意識とをアイデンティファイしてゐる點に問題があると指摘される。これらのことについての科學的社會主義の創始者達の仕事については改めて述べるまでもない。第六章プロレタリア意識に於ては、新技術への適應、恐慌による週期的な地位の變動、資本の發展による地域的な人員の分配、生活の機械化、同僚の發生、社會的個人的な地位の自覺、これ等は社會主義の學說と共にその意識の成立に寄與した。その内容として憎惡、嫉妬、遺恨、の如き感情的要素を擧げることには適當ではない。その地位が不安定であると云ふ一種の社會的距離の感じは實際には社會的階梯に於て何等の確定した地位をもたぬことの意識であり、それと共に連帶性の觀念が生じる。一人の人間としての價值から、また勞働の價值から、さらに集團性 *massmindedness* からその意識はつくりだされるが、それは必ずしも社會主義たるものではない。或はリベリズムに、トレード・ユニオンズに、國民的なまた基督教的な傳統に、サンチカリズムにと云ふ風に分岐する。此の分岐を力説するところにブリーフスの議論の特徴があるわけである。第七章プロレタリアートの起源、これは工業及び農業に於けるそれぞれの特性、都市人口集中の根據、彼等は如何なる社會層から來たかの問題を含む。これは周

知の如く原始的蓄積の理論として知られてゐるところであるが、著者はゾムバルトのマルクス批評を受けいれ、資本の發展にとつて必要な勞働を生みだしたものはまづ第一に人口の増加であつてプロレタリアの子孫であり、第二に農村の解體に基くと云ふ方式を立てるのである。第八章はプロレタリア運動と題され、社會主義、勞働組合運動、協同組合運動に大別して説かれるが、著者は第一のものが決してプロレタリアが存在として有つイデオロギーではないことを主張する。即ち單一の階級利害と云ふものはなく、職業的、文化的、國民的等に分岐してゐるとなす。第九章プロレタリア連帶性の性質に於てその連帶性は決して集團としての存在から出て來るものではなく、外部からの壓迫に基くとなし、その基因を宗教的、國民的、倫理的等の一般的要素に求める。第十章はその分類の試論で、各種の分類が試みられるが、1 産業化の進んだ英、獨、瑞西、白耳義等のそれ、2 北米のそれ、3 佛、伊、和蘭、丁抹、瑞典等の農業の比重の多い資本主義國のそれ、4 支那、印度の如き資本主義發展の初期に在る國々のその如き分類が試みられる。著者にとつて問題は2に在るが、それは第十二章でとりあげられる。第十一章はその社會的循環を問題とする。こゝで資本主義の發展は單純に生産手段をもつものと然らざるものとの一線に

・  
わけること不可能にし、俸給と社会的地位とは相対的なもので、監督的地位に於て而もプロレタリアであり、プロレタリアであつて而も高い俸給をとるものがあることを指摘する。著者の見解は絶対的窮乏の法則に關して可成り樂觀的である。續いて第十二章で亞米利加勞働の特質が述べられる。先づ第一にゾムバルトの『何故社會主義が此處にないか』と云ふ論文に關して天然資源の豊富な開發的資本主義に於てその勞働が永久的・相續的性質でなく、従つてプロレタリア的性質をもたないことが説かれる。西部は最初は謂はゆる産業豫備軍を吸収し、そのイデオロギーは中産階級的であつた。民主的進取的氣象が社會に充ちてゐた。だがやがてナイツ・オフ・レイバー、I・W・W、アメリカン・フェデレイション・オフ・レイバーと勞働運動は發展し他の諸國にみられる現象がこゝにも發生して來てゐる。ことに廿世紀の不況期に入つて以來階級分化の過程は急速に進行してゐると。第十三章は資本主義の冒險と題される。それは人身の自由と法律の前の平等とが永久的な無所有と勞働階級の側に於て結びつけられてゐることを意味するのであるが、著者は社會保險に多くの期待をもつたものの結局資本の要求がそれを裏切つたことを現實から教へられる。最後の第十四章「西洋文明への挑戦」で「勞働人口が彼の人格を團體組織と公共制

度との裡に定置することによつてのみまもりうる限り、即ち彼の人生の眞實に公共團體的命令に、要するに人間が人格として成長し成熟する本質的な社會形態たるところのものに、何等の關係なしにさうしうる限り、西洋文明への挑戦はなされるであらう」(二八四頁)と云ふのが結論で、彼は人格を説き、その宗教(カトリック的)への關係を求めるのである。此の點に於てブリーフスの意見はマックス・シェーラーの資本主義論と参照せらるべきであらう。(田中熙氏、哲學研究、昭和十三年十二月)。基督教の立場から資本主義を問題としたものとしてなほR・H・トウナーが擧げられる。(The Acquisitive Society, 1927. Equitatively, 1929. etc.) 我々は斯かる社會思想に對する所感を「社會哲學のイギリス的形態」と題する別文を以て充當することとし、こゝでは現在の社會思想が平等の問題として取り上げられてゐることについて一言しておきたい。

手塚壽郎氏は嘗て「オウエンがなせる金屬貨幣廢止の試みと其失敗の意義」なる論文に於て(中央社會事業協會發行「社會事業」昭和三年十一月號別刷ロバート・オウエン七十年記念論文集收載)その結論として「オウエンが、彼の勞働交換銀行の失敗を通じて示してくれた勞働紙幣の運用の條件は、此紙幣の運用に必要な條件の總てではない。げにや勞働紙幣の運

用は常に生産の組織化を缺くべからざる條件とするのみでなく、消費の組織化を條件とするのである。即ちそれは生産の強制と消費の強制とを缺くべからざる條件とするのである。さればもし正義が生産者の労働全收権を要求するものであるとしたら、正義の行はるゝ所に自由はないであらう。反對に自由の行はるゝ所に正義はないであらう。自由か正義か、人はそれらの何れか一方をしか選ぶことしか出来ないものである。」と云はれてゐる。また堀経夫氏もその著『經濟と自由』を終るに當り「自由主義の行詰りと平等主義の出現」を説かれ、「今吾々は平等と自由との岐路に立つてゐる。自由論を飽くまで固執して、企業に労働に消費に吾々の自由奔放なる活躍を縦にせんとするや？ 若くは平等論を提げて自由論に迫り、寧ろ少数人の自由を抛つて萬人の平等に就かんとするや？ これ今日の經濟政策上の根本問題である。」(三〇四頁)と述べられた。その他高田保馬博士も「近代の社會運動がその實、自由の要求に根ざさずして平等の要求に根ざしてゐると云ふ見方」をとられると共に、かのブーグレの『平等思想の社會學的考察』(本田喜代治・木村健助兩氏共譯あり)に倣つて、「私は社會の進みゆきを平等化、水準化の過程として考へたい。」と明言してをられる。(『社會學に於ける平等思想』・岩波講座『世界思潮』第十一冊)その他最近のも

のでは木村禧八郎氏は「富の絶對量が増大してもその配分關係が不公正であり、不平等であるならば、經濟的厚生は却つて低下し、墮落したと見るべきである」ことを強調され「經濟配分の公正化、平等化」の必要を説かれてゐる。(同氏、經濟批評の課題、セルバン・昭和十五年五月號)だが斯くの如き態度が果して正しいであらうか。木村氏はシュモラー的・獨逸社會政策的・分配の正義を説かれるものの如くである。然し分配は既に述べた如く生産を前提とする。分配の平等の問題は畢竟生産の問題であると思はれる。また手塚氏の説かれるところは謂はゆる計劃經濟が消費をも規制しなければ成立しえないと云ふことを云はんとするもので、ミーゼス、即ち前述した氣賀氏等の見解と符節を合する。だが消費の自由を或る程度認めたと上で計劃經濟は現實に成立してゐるのである。(拙稿「統制主義と統制經濟」三笠書房『現代教養講座』第五卷参照)。その他高田博士の見解はかの第三史觀に他ならないが、社會の個人主義化乃至合理主義化は決して博士のみられる如き冷い理智的打算に耽る人間を生みはしない。目的合理的態度はまさに人間的な豊かな感情を含む價值合理的態度に轉換しうるのである。而して資本主義社會はあたかも斯くの如き態度による價值合理性の實現を計劃經濟の問題を契機として要請してゐると思はれる。(目的合理的Ⅱ價

値合理的と云ふことはかのマックス・ウェーバー『經濟と社會』より出て來たことで小松堅太郎氏が『社會構造の理論』その他で屢々紹介せられてゐる。近代社會の矛盾は觀念上には目的合理的と云ふことの交錯乃至倒錯・衝突となつて現れて來てゐる。そのとき我は價值合理的態度をとることによつてそれを解決してゆくことができるであらう。云ふまでもなく、此の場合價值合理的とは最早かの藝術のための藝術と云つたやうなことではなく、歴史的な大衆をその背後にもつてゐるものでなくてはならない。そのときそれはウェーバーに於ける如く單に主觀的なものではなく、客觀性をもつたものとして實現されるであらう。(Vgl. A. Kranold, Vom ethischen Gehalt der sozialistischen Idee. 1930. Art. "Liberty", "Equality" in the "Encyclopaedia of the Social Sciences".)

### 参考文献

經濟哲學と云ふとき、それは廣い意味で文化哲學の一つに屬するものと考へられるかも知れない。然しこれとても傳統の考へ方であつて、經濟なるものはさう云ふ文化としては掘み切れない反抗的な性格を擔ふやうになつて來てゐると考へられる。ともあれさう云ふ文化哲學の代表的なものの一つとして、池上謙三『文化哲學基礎論』(昭和十四年、岩波書店)、が擧げられるが、餘り好ましいとは云へない。文化と云ふ語義については寧ろ、木村素衛「文化の本質と教育の本質」(哲學研究・昭和十五年一月二月)が参考になる。その他却つて高坂正顯『歴史哲學と政治哲學』(昭和十四年、弘文堂)やその他中島重『社會哲學的法理學』(昭和八年、岩波書店)、三谷隆正『法律哲學原理』(昭和十年、岩波書店)、橋本文夫『社會法の研究』(昭和十年、岩波書店)、恒藤恭『法の基本問題』(昭和十一年、岩波書店)、栗生武夫『法の變動』(昭和十二年、岩波書店)、の如きが經濟哲學の参考文献たりえよう。

我が國で經濟哲學と云へば何と云つても、左右田喜一郎博士(全集、岩波書店より刊行)であらう。「ジムメルの經濟哲學が經濟學の領域外にそれ自らの王國を築かんとするに反して、左右田博士は

リッケルトの科學方法論を出發點として、經濟學自體の學として存立の基礎を追求し、經濟學概念の再構成を志した。その經濟哲學は、それゆゑに、先づ經濟學に對する一つの方法論的批判としての役割をもち、同時に經濟生活に對する知識内容の基礎付けを演ずるものである。この意味においてその經濟哲學の全領域は、これを經濟學認識論、經濟學方法論、經濟的文化價值論に分ち得る。凡そ概念構成には先天的要素が必要であるが、その先天的要素は概念構成の認識目的によつて制約せられる。いま經濟學においても、それが一個獨立の學たることを要請するかぎり、斯學獨得の認識目的が存せねばならぬ。いまこの特殊の認識目的の論理的性質を促へ、それが學問體系のうちに占むる地位を確定することは、即ち學としての經濟學を確立する所以であるが、これ經濟學認識論の任務でなければならぬ。ところで左右田哲學によれば、この認識目的は歴史學のそれに連なり、そしてそれを内容的に制約し決定する指導概念として貨幣概念が舉示される。かく見るならば、經濟學はその方法論的性質として一義的に歴史學に含まれることとなるが、經濟學には經濟史の他になほ理論經濟學の問題がある。かくてその經濟學方法論によれば、その認識目的に照合せられて、個別的一回的意義をもつ目的論的價值關係的なる概念構成を可能とするものは即ち經濟史であり、また事象の認識表面上における普遍化概念の構成を可能とするものは即ち一個の歴史的文化科學たる理論經濟學である。が斯る經濟諸概念も、究極においては貨幣概念自體を即ち貨幣價值自體を究明するものでなければその方法論的

意義を悟ることはできない。かくて貨幣價值乃至經濟價值の解明に至らざるを得ないのであるが、それは經濟的文化價值の認識論的究明に俟たざるを得ない。經濟哲學はかくして經濟的文化の性質構造を追求すべき價值哲學となる。左右田博士の所謂『極限概念の哲學』はかくて經濟哲學の依つて立つ根柢を築かんとしたものである。それ故その經濟哲學を批判せんとせば、まづ博士の價值哲學の根柢を批判しなければならぬ。」と恒藤恭氏は云はれてゐるが、左右田博士の面目を示すものは、横濱社會問題研究所編『新カント派の社會主義觀』（大正十四年、岩波書店）に收められた「文化哲學より觀たる社會主義の協同體倫理」であらう。これについては、金子鷹之助「左右田博士の『協同體倫理』（商學研究・昭和二年十月）なる論文がある。その他左右田博士の貨幣論の内容については Herbert Döring, Die Geldtheorien seit Knapp, 2Aufl. 1922. の如きに簡単な紹介がある。なほ左右田博士に對する解釋、疑義等を述べたものとして杉村・二木兩氏執筆の『經濟哲學』（改造社版經濟學全集第九卷昭和八年）が最もすぐれてゐる。

二木保幾氏は近代社『哲學講座』、日本評論社『社會經濟體系』、早稻田大學『政治經濟講義』、春秋社『大思想エンサイクロペディア經濟學』等に「經濟哲學」を執筆せられてをり、かねてマルクスに對する批評家としてきこえてゐたが先年歿くなられた。その説かれるところは比較的理解し難いが、「共產主義及び無政府主義と佛教」（佛教思想・第四卷第1號）や『經濟學講義』（昭和三年再版明善



社)の如きを参照すればその相對主義的論旨は把握するに困難でない。

杉村廣藏氏は岩波講座『哲學』に於ける「價值論史」、「哲學と經濟學との交渉」の如き論文から始まり、『經濟哲學の基本問題』(昭和十年、岩波書店)、『經濟倫理の構造』(昭和十三年、岩波書店)その他『經濟哲學通論』(昭和十三年、理想社)、『經濟學方法史』(昭和十三年、理想社)、『カント』(昭和十年、三省堂)の如き著書ある我が國經濟哲學の云はゞ第一人者であるが、その思想は明かに左右田博士の近代化であり、忠實なカール・メンガーの學徒であると思はれる。封建的色彩強き思想界に於ては存在理由をもつであらうが、餘りにも一切の客觀的なものを無視してゐる嫌ひがある。

本多謙三『哲學と經濟』(昭和十三年、理想社)が擧げられるけれど、此の書の編纂については、私には相當意見がある。即ち「社會科學の科學性」(商學研究・昭和三年一月)、「社會に於ける法則」(新興科學の旗のもとに・昭和四年九月)、「經濟方法論の現段階的意義」(中央公論・昭和五年十二月)、「イデオロギーとしての經濟學」(理想社『イデオロギー論』收載)、と云つたやうな本多氏のすぐれた一面を窺はせる論文が省いてあることである。これ等の論文は十分評價せられねばならない。大西猪之介『囚はれたる經濟學』(大正九年、寶文館)は左右田博士に續いて經濟學の自己反省を試みられたもの、その名文は今なほ人の心をひく。經濟學を初めて學び始めた人の一度は讀んでおくべきものであらう。これについては大内兵衛氏が「大西猪之介君の思ひ出」を語られた小文が『大西猪之介

經濟學全集』の見本刷に載つてゐて面白い。「……數年の後、不圖したことから俗務をやめて學窓に歸つたとき、大西君の『囚はれたる經濟學』が出た。之はまたいたく私をこまらせた。このやうに哲學的にこのやうに高所からこのやうに一把一からげに論じなければ、經濟學と云ふものはやれぬものだらうかと云ふのが私の疑問となつたのである。その當時、私は初めて大西君と相識り大に談ずる機を得た。そしてまことに一見舊知の感をいだくことを得た。また花やかな君の講演をも聞くことを得た。そして甚だ失禮ながら、『この才人おしい哉、經濟學に囚はれずして經濟學を囚へんとする。それは非望なり』と思つたのであつた。」と。

高木友三郎『生の經濟哲學』(昭和八年、森山書店)、楠井隆三『理論經濟學認識論』(昭和十四年、有斐閣)の如きについてはさして述べるべきこともない。またその水準もさして高いとは思はれない。赤松要『ヘーゲル哲學と經濟科學』(昭和六年、同文館)の著者は『理想』第九十一號に「經濟哲學の日本的自覺」なる論文をものされてゐる。(雑誌『理想』は數年前の或る號と第九十一號とを經濟哲學のために特輯してゐる)。そこでは「かかる認識方法が全體生活の中から汲みとられ、これが經濟學の方法として自覺されるところに經濟哲學の重要な任務がある。經濟學の内在的反省だけではこの一般的方法の自覺は困難であり、従つて經濟學がこれを自覺しないとき、一般生活のあり方の變化に氣づかず、全體の脈博と異なつた方法に固執する危険がある。否な、それは或る程度において必ず

矛盾として現はれきたる。實はこの矛盾を媒介として經濟哲學的考察が要請せられるのであつて、わが經濟學の日本の地盤への反省はかくのごとくして起つてきた。」と述べられてゐる。我々は氏の謂はゆる綜合辯證法なるものについて明かにしないが、氏の哲學の概念は我々がテニエスについてみたやうな否定を経ざる極めて平面的なものであつて、社會學と云はれるにしても哲學と云はれるには不足であること、また最近の風潮に倣つてそこには理論と政策との混同があり、さらに我が國民經濟の特殊性の認識についても幾多の不備があるやうに思はれる。價值哲學に反對の立場をとられた大熊信行氏『經濟の本質』(第二版昭和十四年、同文館)が今日政治的には赤松氏と共に杉村氏と同じ立場に合流せられてゐることは興味あることである。

ゾムバルトは、「經濟哲學」なる語は今日許し難き仕方では濫用され、その名稱のもとに理論的國民經濟學の著述が示されてゐる。例へばアルトゥール・ホフマンの『哲學の領域に於ける文獻報告』, „Literarische Berichte aus dem Gebiete der Philosophie“, にも「經濟哲學」の項目はあるが、人もあらうにカッセルの集中論などが載つてゐて一向それらしいものはみえない、(Drei Nationalökonomien, S. 294.) と云つてゐるが、彼は經濟哲學者としてマックス・ウェーバー、マックス・シェーラー、オットマール・シュパンの如き人を擧げてゐる。そのうちシュパンについては私も『現代經濟學の危機』(昭和十五年、三笠書房)なる翻譯書の解説の部分で述べたからこゝでは觸れないとして、マッ

クス・ウェーバー、梶山力譯『プロテスタントイジムの倫理と資本主義精神』(昭和十三年、有斐閣)は多くの資本主義精神論の文獻——ボルケナウ、横川・新島譯『近代世界觀成立史』上卷(昭和十年、叢文閣)、ヴェブレンのもの等も参考となる——と共に經濟哲學のよき參考文獻であらう。マックス・シェーラーについては田中熙氏が「西哲叢書」や雑誌「哲學研究」で紹介してをられる。なほジムメルの貨幣の哲學は有名で、屢々經濟哲學の參考文獻に擧げられる。然しそれは云はゞ貨幣の形式社會學的考察である。堀井實氏の翻譯が分析篇だけ斯文書院から出版されてゐたが、比較的最近傍島省三、『貨幣の哲學』(昭和十五年、日本評論社)と云ふ全譯が出た。なほ恒藤恭『ジムメルの經濟哲學』(大正十二年、改造社)と云ふのがある。これも前篇の紹介が主となつてゐる。私は寧ろ N. J. S. Kman, the Social Theory of Georg Simmel, Chicago, 1925. スバイクマン、山下覺太郎譯、『ジムメルの社會學論』(昭和七年、實文館)を好著だと思ふ。この本は一讀しておいてよいものである。

その他ブルガコフ、鳥野三郎譯『經濟哲學』(昭和三年、改造社)と云ふ書がある。ブハーリン『帝國主義と資本の蓄積』第三章にはブルガコフの著書を読んだあげく狂人になつたシメオン・ストルブニークと云ふのが出て来るが、謂はゆる觀念論は即ちソリプシズムではないとはいへ、私はこの本を讀み難い本だと思ふ。なほジェームス・ボナー、東晋太郎譯『經濟哲學史』(大正十年、大鏡閣)は經濟思想史とも云ふべきもの、平凡な著書である。その他 Hans Freyer, Die Bewertung der Wirt-

schaft im philosophischen Denken des 19. Jahrhunderts, 1921. にしても、シュラニール、ウーゲル、堀・三谷譯『現代經濟學概観』（昭和九年、日本評論社）にしても、同様極めて平面的な著である。寧ろ經濟哲學として傳統的な哲學の上に立つて新たに構成されるとしたなら、着眼されるべきはシュブランの『生の形式』その他であらう。然しさうしたあたかも三木哲學を思はせる如き企ては別として從來のところでは、

R. Stolzmann, Der Zweck in der Volkswirtschaft, 1909.

Grundzüge einer Philosophie der Volkswirtschaft, 1920.

Wesen und Ziele der Wirtschaftsphilosophie, 1923.

Hermann Levy, Volkscharakter und Wirtschaft, Ein Wirtschaftsphilosophisches Essay, 1926.

Robert Wilbrandt, Oekonomie, Ideen zu einer Philosophie und Soziologie der Wirtschaft, 1920.

Ditto, Das Problem der Volkswirtschaftspolitik.

の如きものしか發表されてゐない。シュトルツマンは周知のごとく、ディール、シュタムラーの考へ方をする人で、斯かる考へ方に對してはウェーバーやアドラーの批判あることは云ふまでもない。レヴィは多才な人であるが、我が國に於ては羽仁五郎氏が嘗て『轉形期の歴史學』で、此の書に觸れてをられる。ウィルブランドは限界效用の立場を脱してゐない。

謂はゆる方法論と云ふことについては、慶應義塾文化科學研究會編『經濟學方法論』（昭和八年、大倉書店）の如き小さいものから戸坂潤、『科學方法論』（昭和六年、岩波書店）、堀經夫、『轉換期の經濟思想』（昭和十四年、三笠書房）の如きがある。何れも好著である。大河内一男、『轉換期の經濟理論』（昭和十五年七月十五日帝大新聞）の如きと共に参照せられたい。その他、古くはJ・S・ミルのもの、即ち『論理學體系』、新しくは F. Kaufmann, Methodenlehre der Sozialwissenschaften, 1936. の如きがある。アベズガウス・ドゥコール、岡本・稻葉譯、『辯證法的經濟學方法論』（昭和八年、白揚社）の如きも見落されない。私の翻譯したマックス・ウェーバー、『社會科學と價值判斷の諸問題』（昭和十二年、有斐閣）或はカール・メンガー、『社會科學の方法に關する研究』（昭和十二年、日本評論社）、さらにシュモラー、『國民經濟、國民經濟學及び方法』（昭和十三年、有斐閣）並びに同じくシュモラー、『法及び國民經濟の根本問題』（昭和十四年、有斐閣）の如きは材料となるであらう。外國のみならず L. Stephniger, Zur Methode der Volkswirtschaftslehre, 1907. Josef Back, Die Entwicklung der reinen Oekonomie, 1929. の如きがあるが、何れもたいしたものではない。やはり A. Amann, Objekt und Grundbegriffe der Nationalökonomie, 2te Aufl. 1927. が標準であらう。馬場敬治、『經營學方法論』（昭和六年、日本評論社）の如きも、それに據られてゐる。問題はリッケルトの方法論とアモンの經濟學の内容にある。その他經濟哲學と云ふ名稱についてはペロルツハイマーや

ハスハーゲン（『シュモラー年報』一九四〇年六月號參照）等の名が擧げられる。一般に哲學、社會學、經濟學の解釋如何によつて種々な結びつきが考へられよう。三木清氏の著書をその最初のものから今日のものまで引續き讀むことを斯うした問題に初めて取掛る讀者には薦めたい。

然し經濟哲學と云ふとき重要な問題は法則の問題であると考へられる。而して法則と云ふ問題について最も取上げるべき問題は轉換期に於ける法則と云ふことであらう。Ernst Oppler, *Der Begriff des Wirtschaftsgesetzes in der Volkswirtschaftslehre, Eine Probleme-geschichtliche Untersuchung.* 1930. ボグダノフ・ミハイロフ『近世哲學史および辯證法的唯物論における因果性の問題』（昭和八年、ナウカ社）の如きがあるが極めて平面的で、寧ろ Alfred Müller-Armack, *Entwicklungsgesetze des Kapitalismus*, Berlin, 1932. の如き内容あるものを求めたい。斯くて經濟哲學の參考文獻としては次の如きものを擧げる他ないであらう。

Max Adler, *Marxistische Probleme, Beiträge zur Theorie der materialistischen Geschichtsauffassung und der Dialektik*, 3te Aufl. 1919.

Max Adler, *Das Soziologische in Kants Erkenntniskritik, Ein Beitrag zur Auseinandersetzung zwischen Naturalismus und Kritizismus*, 1924.

Ernst Troeltsch, *Der Historismus und seine Probleme*, 1922.

Ernst Troeltsch, *Der Historismus und seine Ueberwindung*, 1924.

Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 1922.

一般に哲學、經濟學の古典が擧げられることは云ふまでもない。その他社會思想の著者、就中

S. & B. Webb, *A Constitution for the Socialist Commonwealth of Great Britain*, 1920. （丸岡重

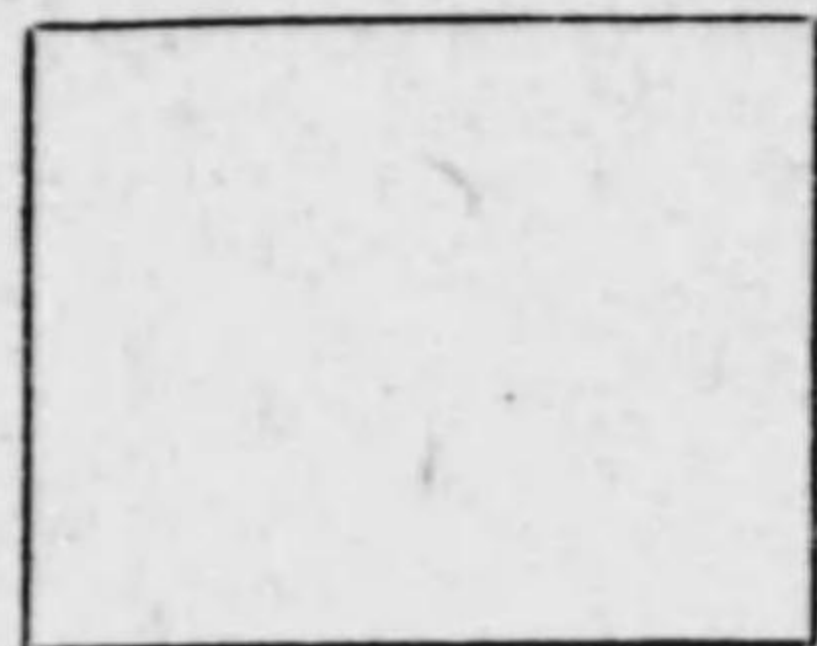
徳氏註）

G. D. H. Cole, *Principles of Economic Planning*, 1935. （八木澤善次氏譯）

L. Rockow, *Contemporary Political Thoughts in England*, 1925. の如きはよき參りとならう。

現代理學藝全書

— 20 —



昭和十六年二月八日印刷  
昭和十六年二月十二日發行

經濟哲學 上卷

定價 一圓

著者

戸田武雄とだ たけお

發行者

竹内富子たけうち ともこ

印刷者

堀内文治郎ほりうち ぶんぢろう

發行所

三笠書房

東京市神田區西神田二ノ二二  
電話 九段四〇一三番  
振替東京二二〇九六番

小社の出版物中萬一落丁、亂丁その他不備の品がありました場合は、早速御取換へ致しますから、御手数乍ら本社宛お送り下さいます様願ひあげます。

## 現代學藝全書刊行の辭

東亞新秩序の建設は歴史が吾々に課した光輝ある使命である。これが完遂に當つて凡ゆる頭腦の動員が要求され、就中若き世代の中核的推進力としての地位は、極めて輕からざるものがある。出版文化の齎らす意義も、斯る國家的見地から、今日程重大な時はあるまい。しかも近來、用紙難其他各種の統制に際會しながら尙ほ且つ出版界は曾て見ざる好況を呈して居り、この間或は商品主義的なもの無しとせず、國民文化昂揚の上に、尠からざる問題の伏在するのを見るのである。

現代學藝全書はかかる時に當り、出版文化の本來的使命に立脚し、且つ、從來の動もすれば直譯的な文化圏に、日本的創造の生命力を附與し、以て眞に興亞の文化的前進の基地たらしめんとするものである。

學藝全分野を網羅せる本全書の編纂に當つては、各々の部門の讀書人の立場を體し、先づ在來の學問的専門の桎梏を解き、その平明な敘述と、総合的な、體系とを以ていづれも創造的な、新鮮な知識の淵藪たり得ることに力點を置いた。執筆者は敢へて高名に銜はず、眞に現役的權威、潑刺たる新鋭に懇請し、その學的良識にゆだねた。しかして本全書独自の壓縮された端的な形式と廉價とにより廣く一般への普及を旨とし、以て學術日本の最前線を宣揚せんとするにある。

時恰も新體制下の文化昂揚の秋、吾々のこの意圖に御協賛御支援を江湖に望んでやまぬ次第である。

昭和十五年十月

三笠書房主識

# 現代學藝全書 內容

新四六判二五〇頁平均  
定價各册一圓送十錢

## 哲學・思想篇

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 1 哲學入門 樺俊雄       | 10 萬葉精神 椎崎法藏    |
| 3.2 西洋哲學史上下 藤平武雄 | 11 日本神話の精神 前澤雅男 |
| 4 現代獨逸哲學 鈴木三郎    | 12 科學概論 富成喜馬平   |
| 5 現代佛蘭西哲學 吉岡修一郎  | 13 心理學 山田坂仁     |
| 6 現代亞米利加哲學 堀秀彦   | 14 社會心理學 松浦孝作   |
| 7 現代日本哲學 瀧澤克己    | 15 宗教文化 熊野義孝    |
| 8 東洋精神 秋澤修二      | 16 回教文化 小林元     |
| 9 日本文化學 池島重信     | 17 法律論 木村龜二     |
|                  | 18 文化科學 小松攝郎    |

## 經濟・社會篇

- |                 |                   |
|-----------------|-------------------|
| 19 經濟學入門 堀經夫    | 30 蒙古資源經濟論 楊井克己   |
| 20 經濟哲學 戶田武雄    | 31 支那農業論 佐藤晴生     |
| 21 經濟學說史 相澤秀一   | 32 支那經濟文化 森谷克己    |
| 22 財政學 相澤秀一     | 33 北支經濟地理 阿部市五郎   |
| 23 現代景氣變動論 豐崎稔  | 34 中支經濟地理 未定      |
| 24 貨幣論 青木孝義     | 35 南支經濟地理 河合俊三    |
| 25 經營學 番場嘉一郎    | 36 支那近代經濟論 宇佐美誠次郎 |
| 26 電氣經濟論 北久一    | ——歐米資本と利權の解剖——    |
| 27 協同組合論 奥谷松治   | 37 植民政策史 堀眞琴      |
| 28 日本農業經濟論 我妻東策 | 38 現代勞動政策 江森盛彌    |
| 29 日本農業政策論 櫻井武雄 | 39 獨逸社會政策史 後藤清    |
|                 | 40 明治社會政策史 我妻東策   |
|                 | ——士族授産の研究——       |

歷史篇

54 空 海人物と其時代史1

圭室諦成

41 史學方法論 中村吉治 55 源 賴朝 2 遠藤元男

42 亞米利加史總說 恒松安夫 56 織田信長 3 今井林太郎

43 露西亞史總說 除村吉太郎 57 本居宣長 4 北島正元

44 獨逸史總說 富田幸 58 平賀源内 5 高橋碩一

45 伊太利史總說 西村貞二 59 吉田松陰 6 岡 不可止

46 支那史總說 出石誠彦 文藝・教育篇

47 蒙古史總說 青木富太郎 60 文學概論 龜井勝一郎

48 安南史總說 松本信廣 61 日本文學史 山本正秀

49 世界文化史上中下 加茂儀一 62 現代露西亞文學 米川正夫

50 近世社會史 住谷悅治 63 獨逸文學史 秋山六郎兵衛

51 日本古代文化 樋口清之 64 佛蘭西文學史 新庄嘉庄

65 英吉利文學史 飯島小平 77 現代演劇論 未定

66 亞米利加文學史 大久保康雄 78 現代映畫論 北川冬彦

67 文藝學方法論 木寺黎二 79 映畫技術論 河邊照男

68 日本文藝思想 釘本久春 80 日本繪畫史 谷 信一

69 支那文藝思想 奥野信太郎 81 日本工藝史 滿岡忠成

70 西洋文藝思想 成瀬無極 82 現代美術概論 瀧口修造

71 平安朝文學論 川崎庸之 83 音樂概論 守田正義

72 室町文學論 渡邊保 84 體育舞踊 石井 漢

73 江戸文學論 稻垣達郎 85 現代教育學 山下俊郎

74 小說論 阿部知二 86 兒童問題 野口樹之

75 批評論 窪川鶴次郎 87 兒童教育論 市橋善之助

76 現代短歌文學論 渡邊順三 88 日本兒童文藝史 菅 道忠



自然科學篇

- 104 精神病理學 式場隆三郎
- 105 環境的人間學 巴陵宜祐
- 106 現代生理學 林 麟
- 107 現代生物學 篠原 雄
- 108 文化と生物學 佐藤隼夫
- 109 生物學史 永野爲武
- 110 古生物學 西山省三
- 111 發生學史 元村 勳
- 112 生態學 石田周三
- 113 下等動物ホルモン 永野爲武
- 114 血液 谷田專治
- 115 病理と豫防醫學 原島 進
- 94,93,92,91,90,89 世界技術史上中下 相川春喜他
- 95 理論物理學 石原 純
- 96 一般電氣理論 吉松氏吉
- 97 自然科學的世界像 平野次郎
- 98 地震學序說 官部直己
- 99 進化論發生學 長廣岸郎
- 100 現代實驗理化學 白井俊明
- 101 原子核物理學 未 定
- 102 現代工業概論 市川忠一
- 103 條件反射學方法論 林 麟

語學篇

- 116 入門獨逸語 石川鍊次
- 117 入門露西亞語 除村吉太郎
- 118 入門佛蘭西語 山本直文
- 119 入門西班牙語 笠井鎮夫
- 120 入門英 語 清野暢一郎
- 121 入門伊太利語 未 定
- 122 入門支那語 未 定
- 123 入門蒙古語 後藤富男
- 124 入門馬來語 未 定



